

# 学友かわら版



国際ロータリー第2770地区 学友会発行  
第一号 平成24年4月1日

## 目次

1.	「巻頭言 「学友 かわら版」の創刊にあたって」	1
2.	「英国留学体験記」(The Rotary Foundation Fellowship Experience is an experience truly worth experiencing.) 鈴木五郎	3
3.	～Alles Walzer！音楽がつなぐ多民族の輪～ 関根裕子	6
4.	「エジンバラへの留学・スコットランド民謡」 小池剛史	8
5.	「1990年代半ばのイギリス留学(1)」 原田俊明	11
6.	「留学生生活を振り返って」 中津川祥子	13
7.	編集後記 小池剛史	16

## 巻頭言 「学友 かわら版」の創刊にあたって

2011年10月より、学友会幹事組織は新たな体制となりました。新会長に関根裕子、副会長に小池剛史、根岸晃(留任)、幹事に原田俊明(留任)、副幹事に中津川祥子が就き、そして顧問として、これまで長年にわたり学友会会長を務めてこられた鈴木五郎先生になっていただきました。

学友会の構成メンバーを繋いでいる唯一の絆、それはかつてロータリー財団から奨学金をいただいて海外へ留学をしたという過去だけです。それだけで私たちは自動的に学友会という組織に入っています。この絆は、「ただそれだけ」と捉えればそれだけに終わります。しかし、留学での貴重な体験、その中で得た知識、知恵、文化、新たなものの考え方、そしてそれが現在学友それぞれの生活の中でどう活かされているか...それらを考えると、学友会という組織が持つエネルギーは無限大のものがああります。私たちは、分野も年齢も住んでいる地域も全く異なります。しかし、この力を結集し、それぞれが自分の留学体験、現地で学んだこと、そしてそれがどのように今の生活に活かしているのかを、他の学友に紹

介してみてもどうでしょう。そうすれば、学友全体でロータリー留学という貴重な経験が共有されるだけでなく、その本人にとっても自分自身の留学の意義を見つめ直し、現在の仕事や生活よりよくするためのきっかけになると思います。もちろんその経験は、これから留学しようとしている候補生たちにとっても非常に有益なものになるはずです。

留学から帰ってきて、私たちは別々の生活環境の中にいます。頻繁に定期的に会えることが理想ですが、それが難しいのが現状です。しかし紙面上であれば、それほど大きな負担もなく、留学経験を共有しながら、学友同士の輪を広め、情報交換することができるのではないかと考えて始まったのが、この「学友 かわら版」です。かわら版に掲載する記事は

- ・自身の留学体験（留学準備のこと、留学中のこと、いずれも）
- ・留学体験が現在の生活にどのように活かしているか
- ・留学地の文化コラム
- ・これから留学する方へのアドバイス
- ・その他、学友会のイベント等（オリエンテーションも含む）のお知らせ

このかわら版によって、私たち学友の連携が再活性し、いつか大きな力となっていくことを願っています。

学友会 幹事会一同

## 英国留学体験記

(The Rotary Foundation Fellowship Experience is an experience truly worth experiencing.)

学友会 顧問 鈴木五郎

1975年～1976年度派遣 国際親善奨学生  
留学機関：バーミンガム大学（英国）

イギリスのバーミンガム大学付属シェイクスピア研究所に留学（1975.9～1976.9）してから、かれこれ3分の一世紀以上の歳月が流れた。「歳月人を待たず」とは蓋し明言であり、刻一刻と流れる時間の大切さを意識せずして人は日常の日々を過ごすことはできない。特に海外留学という異文化コミュニケーション（intercultural communication）の枠組みの中で過ごした歳月はとりわけ特別な時間帯、いわば非日常的時間帯とでも言うべき性質のものに属し、そこでの体験は確固たる意識に裏付けられたものであるがゆえに尚更鮮やかな印象を形成すると同時に、鮮明な記憶として永らく人の心の中に残るものであると言える。

3分の一世紀以上の星霜を重ねたものの、色褪せることなく鮮やかに記憶に残っているのが嘗て訪れた次のような場所である。バーミンガムの中心街にあるハッピー・ギャザリング（Happy Gathering）と呼ばれる中華料理店、ハドソン書店（Hudson Bookshop）、バーミンガム中央参考図書館（Birmingham Central Reference Library、特に Shakespeare Memorial Collection が設置されていることでも有名）、バーミンガム・レパートリー劇場（Birmingham Repertory Theatre<1913>）、ジャコビアン様式建築のアストン・ホール（Aston Hall-Birmingham Museum & Art Gallery）、赤煉瓦のバーミンガム大学（Oxford, Cambridge に対して redbrick university）、世界教会主義（ecumenism）を貫くクィーンズ・コレッジ（Queen's College）、エジバトン公園通りにあるジョージ王朝建築のシェイクスピア研究所（The Shakespeare Institute）、ストラットフォードの王立シェイクスピア劇場（The Royal Shakespeare Theatre<1932>）、ハンズワース居住のカウンセラー、デイヴィッド・ニール氏（David Neal）私邸、ハンズワース公園（Handsworth Park）、ロンドン大学（London University）、オックスフォード大学（Oxford University）、ケンブリッジ大学（Cambridge University）、ベルギー、フランス、西ドイツ、スイス、オーストリア、イタリア、アメリカ等であり、枚挙に遑がないと言ったほうが正直なところである。それぞれの場所との出会い、そこで体験した感激や感動、美意識や精神的結びつき等は掛け替えのないほど重要なものであり、これらの総体を取りも直さず英国留学体験の実り豊かな収穫の核を形成していると考えられる。とりわけ、ウエストミア（Westmere）のシェイクスピア研究所があるバーミンガム大学との出会い並びに精神的結びつきは、他の何よりもまして強固なものであり密接なものであったと自信をもって言える。

シェイクスピア研究所を初めて紹介して下さったのは、国際的にも著名なシェイクスピア学者で恩師の上智大学ピーター・ミルワード教授（Professor Peter Milward<emeritus

>)であった。ロータリー財団からの推薦校はケンブリッジ大学であったが、最終的にはバーミンガム大学大学院修士課程の正規学生として登録し、一年間の留学生生活をシェイクスピア研究所で過ごしたわけである。ミルワード先生ご自身が研究休暇年度中にシェイクスピア研究所で研究をされた経緯があり、二代目の所長スペンサー教授 (the late T.J.B. Spencer) と懇意の仲でもいらっしやった。そのような経緯から、留学先がバーミンガム大学付属シェイクスピア研究所に決定されたのである。シェイクスピア研究所には修士号と博士号の学位を目指す大学院生約 30 名ほどが文字通り世界中から集まっており、今は亡きスペンサー所長を中心とした専任スタッフ 5 名、客員教授数名、司書 1 名、事務員 1 名を加えた総勢 40 名足らずの小世帯から構成されており、大学院生や研究者にとっては理想的な雰囲気の中で研究や仕事に専念できるよう配慮されていた。シェイクスピア研究所のメンバー (member) に加わると同時に鍵を渡され、各自の責任のもとに研究所の図書やマイクロフィルム、談話室 (Common Room) や複写機、その他の諸施設を自由に使用したり、閲覧したりすることができるという特権 (privilege) が与えられた。また、メンバーの紹介であれば、研究所以外の人でも研究所を見学することが許されており、時折日本の大学からも研究者の方がスペンサー教授に付き添われて、研究所内を案内されていたのを見かけたことがある。

シェイクスピア研究所では伝統的に毎週木曜日に開かれるセミナー (Thursday Seminars) を中心として、シェイクスピアの批評史 (history of criticism) や上演史 (stage history) 等に関する講義、チュートリアル (tutorials) と呼ばれる個人指導等が三位一体となって行われていた。上記で専任スタッフ 5 名に言及したが、正式名は特別研究員 (fellows) であり、それぞれ教授や助教授<准教授> (reader) 等を兼ねている。名誉特別研究員 (honorary fellows) もおり、私の留学年度には G.K. ハンター (G.K. Hunter)、フランク・ダンロップ (Frank Dunlop)、I.A. シャピロ教授 (I.A. Shapiro) らの名が連ねられていた。特にシャピロ教授は老齢にも拘らずかなり頻繁に木曜セミナーに出席され、積極的に当日の講師の方等に質問をされていた。そのお姿から数多くの事柄を教えられたのは私だけであつたらうか。深遠なる学問の前での真摯でかつ謙虚な学者の姿勢こそが、他ならぬシェイクスピア研究所で私が学び得た最大の収穫であった。二代目のスペンサー所長は言うに及ばず、スタンリー・ウェルズ (Stanley Wells)、T.P. マシソン (T.P. Matheson)、H.N. デイヴィス (H.N. Davies)、R.L. スモールウッド (R.L. Smallwood) といった特別研究員の諸先生方も、この点に関しては徹頭徹尾謙虚な態度を守り通された。それだけに、銅鑼 (ローレンス・オリヴィエ (Laurence Olivier) 監督・主演の 1948 年のイギリス映画『ハムレット (Hamlet)』は、銅鑼を打ち鳴らすという象徴的な場面から始まる) を合図に開始される木曜セミナーの盛り上がりがいかにばかりであったかは、容易に推し量ることができよう。

シェイクスピア研究所、すなわちバーミンガム大学との出会い及びその精神的結びつきのほんの一端を書き綴ってきたが、どうやら紙幅が尽きてしまったようである。バーミンガム大学との出会いを通して、私の英国留学精神史といったものがより豊かなものに育まれ、成長を遂げることができたのは、偏にロータリー財団奨学金制度並びにそれが掲げる崇高な理念のお蔭であり、ここに謹んで謝意を表する次第である。最後に敬愛するスペンサー先生がこよなく愛されたティンタン僧院 (Tintern Abbey) を詠ったウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth <1770-1850>) の詩 "Lines Composed a Few Miles above

Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour <13 July 1798>" (「旅してワイ河畔を訊ねし時、ティンタン僧院の数マイル上流にて作れる詩」(1798年7月13日))の一節を御霊に捧げることによって、本稿を閉じたい。

And I have felt  
 A presence that disturbs me with the joy  
 Of elevated thoughts; a sense sublime  
 Of something far more deeply interfused,  
 Whose dwelling is the light of setting suns,  
 And the round ocean, and the living air,  
 And the blue sky, and in the mind of man,  
 A motion and a spirit, that impels  
 All thinking things, all objects of all thought,  
 And rolls through all things.

高遠な思想のもたらす喜びでわたしをゆすぶる  
 存在を感じている。それははるかに  
 深くまじり合った崇高な感じで、  
 その棲処は沈みゆく太陽の光や、  
 おおらかな大洋や新鮮な大気や、  
 青空や人間の精神の中なのだ。  
 すべて思索するものや思索の対象を  
 押し進める霊的な動きで、  
 万象をめぐり流れているのだ。

宮下忠二訳

#### 参考文献

- 田中一郎編 『留学生世界に翔ぶ』 さきたま出版会 215-232 1985  
 宮下 忠二 「『抒情歌謡集』について」 『一橋論叢』 第90巻 第6号 819-825 1983

## ～Alles Walzer！音楽がつなぐ多民族の輪～

学友会 会長 関根裕子

1997年～98年度派遣 国際親善奨学生

留学機関：ウィーン大学（オーストリア）

人生は、選択と偶然の連続から成り立っているとも言えます。生まれる環境こそ選択することはできませんが、幼年期に自分の意志というものが育って以来、私たちは日常生活の諸事から進学や結婚などの大きな選択に至るまで、一つの選択がもたらす偶然性の連鎖の中に生きています。私にとって、ロータリー財団奨学生としてオーストリアのウィーン大学への留学という選択は、その後の人生を大きく決定づけるものであったと15年を経た今実感しています。現在、早稲田大学始め6つの大学でドイツ語及びウィーン音楽文化史等を教える傍ら、とくにウィーン世紀末文化研究や翻訳、合唱指揮者としての活動をしています。この留学経験が現在の私のキャリアの根底にあるということはいふまでもありません。

音楽大学を卒業後、20代の終わりまで県立高校に音楽科の教諭として勤務していた私は、いわば「不完全燃焼の固まり」でした。自分の実力の無さを棚に上げて、与えられた環境に対する違和感を覚え、生徒の生活指導ばかりに追われる日々のストレスに押し潰される毎日でした。自分が幼いころから慣れ親しんできた音楽のすばらしさを伝えられないもどかしさと同時に、その裏で明治以来のクラシック中心の学校の音楽教育にも限界を感じていました。そのような中で、短期留学がきっかけで大好きになった「音楽の都」ウィーンは、私にとって文字通り「夢のまち」となり、いつかここに住み、能力の限界まで挑戦してみたいという夢計画を立てるようになりました。

そうとはいえ退職を決断するのに5年もかかり、大学3年次に編入学したときには30歳を目前にしていました。その後大学院博士課程へと進学していく間に、私の専門はウィーン世紀末文化へと絞られてきました。独文研究者として再出発するために、中途半端な音楽実技は封印し、ロータリー奨学生試験を受け、ウィーンへの留学の機会を得ました。

ウィーンでは、昼間は大学の独文学や音楽学の授業に出たり、博士論文のために必要な資料を収集しましたが、夜はほとんど毎日オペラ座やコンサートホールに通いました。国立オペラ座はさしずめ「オペラの博物館」と言えるでしょう。夏季休暇の2ヶ月を除き、毎晩二つのオペラ座でオペラやオペレッタが上演されており、綿密な計画を立てれば年間120本くらいの演目を見ることができます。上から見ると馬蹄形の4階から成るオペラ座は、貴族の社交界の名残と言われます。階層社会の縮図のような客席構造では、昔は舞台を見るというよりも、舞台を囲みながらの社交が繰り広げられたからです。現在オペラの演出や演奏に対する観客の評価は、一部の観光客を除けば、お愛想で好意的な拍手をする日本とも違い、正直なものです。同じ舞台に対して熱烈なスタンディングオベーションの肯定派と足で床を踏みならしブーイングする反対派が激しく戦う場合もあります。ニュース番組ではスポーツよりも芸術の報道時間のほうが長く、カフェでも前日見た芝居やオペラの話や延々と話しているのを耳にします。「音楽の都」の音楽愛好者層の厚さに感嘆する日々が続きました。

そのうち、自分がいかに明治以降の日本の洋楽受容の歪みを受けた学校音楽教育に身を

置いていたかということがわかってきました。多民族の坩堝だったハブスブルク帝国の宮廷都市ウィーンでは、ワルツやチャルダッシュなど、民族舞踊から発展した舞曲が人々の生活の中で生き続け、自分が国という共同体の一員だと自覚させる役割を担っているのです。

その事を実感したのがオペラ座舞踏会でした。私のホストロータリアンの方がこの舞踏会を後援しているオーストリア・カジノの重役であったため、ヨーロッパの社交界の最高峰といわれる空間に足を踏み入れる機会に恵まれました。普段見慣れたオペラ座内部もその日だけは平土間の客席は全部取り払われ、一つの大舞踏会場になっており、いつもよりはるかに豪華で祝祭的な雰囲気でした。ポロネーズの入場行進に続き、デビュータントによるダンス披露、「Alles Walzer！（みんなワルツを！）」のかけ声とともに、一般客がところ狭しとワルツの旋回に身を任せます。夢のような体験の中で一番印象に残っているのは、夜も更けた頃、参加者全員が酔っぱらい状態でジェンカのようにつながり、平土間全体に大きな一つの円を描き、愉快地騒ぎ踊ったポルカです。これはまさにシュトラウスのオペレッタ『こうもり』の第二幕そのもので、会場に居合わせた様々な立場の人々が夢空間で一つにつながり、私もウィーンの社交界に溶け込めたような錯覚に陥った瞬間でした。

『こうもり』同様、夢の後には「牢獄」のような現実がありました。異国で外国人として暮らす不安や寂しさ、ゼミで自分よりはるかに年下の現地の学生と対等に議論できない挫折感や屈辱感も味わいました。そんなとき街角で新聞や焼き栗を売っている浅黒い顔の人々の笑顔や街頭楽士の音楽に励まされました。異国人同士の連帯感です。ふと意識してみると、周りには外国人が多いのです。そうです。ウィーンを「音楽の都」にならしめた音楽家たちもほとんどが「よそ者」です。舞踏会のポルカで手をつないだ人たちも、ちょっと昔は「よそ者」だったのかもしれませんが。そう考えたとき、ふと気持ちが楽になりました。そしていつのまにか私にとっても、下から上へとずりあげる感じのウィーン訛りのドイツ語を音楽にしたようなヴィンナワルツのリズムが懐かしく響くものとなり、音楽とも新しく向き合えるようになりました。今ではウィーンに行くたびに、かつて私に「よそ者」意識を起させた人々が、「お帰り！」と呼びかけてくれているような気持ちになります。

最後に、現在はなくなってしまったホストロータリークラブ制度の存在が奨学生にとって大きな拠り所だったということに触れておきたいと思います。当時現地のロータリークラブの例会への定期的な出席が義務づけられていましたが、私には楽しみの一つでした。質素な生活の留学生にとって、そこに行けば「おいしいものが食べられる」「現地の大人社会に触れ、大人と話ができる」「困ったときに相談したり、助けてもらえる」という、いわば避難所のような空間でした。またクラブ例会の内容もロータリアンによる弦楽合奏や美術展鑑賞会など、ウィーンの文化的生活の特性が出ており、たいへん興味深いものでした。

このようにロータリー財団奨学生としてウィーンへ留学させていただいたおかげで、一度離れた音楽のすばらしさを再発見し、現在の活動に直接つながる人々や出来事に出会うことができました。今後、学友会会長として、ロータリー留学を経験した学友の輪を目に見えるものにし、社会で活躍する学友のすばらしい力を結集することで、ロータリーの発展、世界平和のために貢献できるよう、微力ではありますが寄与したいと思っています。

## エジンバラへの留学・スコットランド民謡

学友会 副会長 小池 剛 史

1999年～2000年度派遣 国際親善奨学生

留学機関：エジンバラ大学（英国）

ロータリーを通じて留学することの醍醐味は、何と言っても地元との人々との関わりを持つてると言うことである。留学生というものは日本でも海外でもつつい彼ら同士で固まりがちである。しかしそれではその土地にわざわざやって来た意味がない。留学する以上は、地元の道を歩き、地元の人と交流し、地元の生活の息遣いを感じることにこそ意味があるのではないかと常々感じていた。ロータリーを通じての留学は、それを可能にしてくれる。

私は1999年～2000年の財団国際親善奨学生として、英国スコットランドのエジンバラ大学に留学した。そこでロータリアンの方たちを通じ、地元スコットランドの文化、特にスコットランドの言葉と歌を身に付けることが出来た。そのきっかけとなった、ホストカウンセラーのダンカン・アンダーソンさんと奥様のフェイさん、そしてホストクラブのポルトベッコ・ロータリークラブとの出会いのことについて書いてみたい。

1999年9月に渡英し、ロンドンにしばらく滞在した後、ロンドン、キングズ・クロス駅発のスコットランド方面行きの列車 “Flying Scotsman” に乗って一路北へ…。

エジンバラのウェイヴァリー駅に到着すると、ホストカウンセラーのダンカン・アンダーソン氏が迎えに来ていた。“Are you Takeshi?” と問われた時、その英語にびっくりした。「アーユータケシ？」ではないのだ。「アルユータケシ？」と“Are”のr部分が巻き舌音になっているのだ。初めて聞くスコットランド訛りだった。

ダンカンさんは自家用車に私を乗せ、お宅に向かった。エジンバラ市街からは外れた郊外にある集合住宅である。お宅では早速奥さんのフェイさんとお孫さんのジェイミー君に紹介された。お茶を飲んで少しくつろいでいると、ダンカンさんは奥の物置のような部屋からたくさんのお酒を持ってきた。ウィスキーやらジンやらの飲み物である。あんまり飲めないんだと言うと「君はスコットランド文化を身に付けるためにスコットランドに来たのではないのか」と一蹴され、ストレートでウィスキーを飲まされた。これが意外と美味しかった。日本では一度も美味しいと思わなかったのだが、なぜかスコットランドで飲んで初めて美味しいと思った。すると今度は「君はウクレレを引くそうだな」と言い、奥からスコットランドの民謡集を持ってきた。パラパラとめくると、歌の題名も見ただけでなく、書いてある英語も普通のスペルと異なる。

*O fine wee lass, a bonnie wee lass, a bonnie wee Jeannie McCall*

そこへ後ろで私たちの話を聞いていたフェイさんが、「これはスコットランドの民謡だよ」といって、とても綺麗なおばあちゃんの声で歌ってくれた。何やら楽しげなメロディーである。しかし歌うとなるとどうしても舌を噛んでしまう。「早く歌おうとするからよ。ゆっくり歌ってごらん」というが、とにかく早口で歌う歌なのでどうにも真似できない。「君は長くエジンバラにいるんだから練習する時間が十分あるよ」とダンカンさんが笑いながら



言った。

この歌は Bonnie Wee Jeannie McCall という歌で、私が留学中にマスターすることになる沢山のスコットランド民謡の最初のものだった。フェイさんと話をしているうちに、だんだんスコットランドの言葉に愛着を持っていった。そこで私は何とかこの曲の入ったCDなりテープなりを手に入れ、マスターしてみようと決心した。それから数週間後、大学の寮の掃除のおばさんがこの曲の入ったCDを持っていることが分かり、翌日CDをテープにダビングしたものを持ってきてもらった。そして、ダンカンさんから貸してもらった歌の本を手にも曲を聞いてみた。初めてプロの歌うこの曲を聴いたが、何と愉快的な歌だろう。歌詞は至って単純である。とある結婚式で新郎の友人代表 “best man” をしていた男と、その時来ていた女性ジュニーが恋に落ち、結婚して子供を三人設ける、という話である。こんな単純な恋歌だが、それがアコーディオンの楽しげな伴奏に乗り、思わず体が動き出すようなメロディーなのである。それを私は何としてもこの歌をマスターしたいと思い、一行ずつゆっくり読んで覚えていくことにした。

*A fine wee lass, a bonnie wee lass, a bonnie wee Jeannie McCall  
I gave her mi mother's engagement ring and a bonnie wee tartan shawl  
I met her at a wadding' in the Cooperative Hall  
I wis the best man and she was a bell o' the ball*

きれいだな かわいいな ジュニー・マコールはかわいい女の子  
彼女にあげたものは 母ちゃんの婚約指輪と タータンチェックのショール  
彼女と初めて会ったのは 公民館での結婚式  
おいらは新郎の友人代表で あの子は舞踏会で最高の花だった

この曲をマスターした頃、ちょうどアバディーンという東海岸沿いの町で R I 1020 地区の地区大会があった。そして二日目夜のプログラムにケイリーダンス（スコットランド独特の伝統的なフォークダンス）があった。生バンド演奏で何と夜 11 時近く（しかも 70 歳近くのおじいちゃん、おばあちゃんまで！）まで踊っていたのだが、その終わるちょっと前に奨学生が何か歌っても良い時間が貰えたので、私は覚えた Bonnie Wee を歌ってみた。するとスコットランド人のロータリアンたちは大喜びで一緒に歌ってくれた。それだけではなかった。その晩、会場からホテルに向かうバスの中で、ロータリアンやその奥様たちがみんな色々なスコットランド民謡の合唱を始めたのである。聞いたこともない歌ばかりだったが、誰も歌詞をそらで覚えていて何とも愉快地に歌っているのである。スコットランドの同じ時代を人々の間にある共感のようなものを感じた。

ある世代の人々がみんな歌える曲というものがある。私の世代であれば、BOOWY やらチェッカーズ、少年隊といったもの。私の父母の世代であれば、美空ひばり、鶴田浩司、フランク永井といったものだろう。どの時代にも「この曲を聴き、口ずさみながら育った」という歌というものがあるものだ。自分とは違う、特に目上の世代の人々が自分の知らないような歌を皆で楽しそうに歌っていると、その時代への憧れのようなものを感じてしまう。

それと同じような憧れを、この（中年以上の）スコットランド人の歌謡曲文化に感じた。

1960年代～70年代にスコットランド民俗文化が再活性化し、特に歌謡の世界ではスコットランドを讃える歌や、スコットランドの町や村を題材にした歌がたくさん生まれた。その時代に育った人たちにとって Bonnie Wee Jeannie McCall のような歌は言わば青春の歌なのである。どの歌もスコットランドの英語で歌われ、標準英語で歌われる歌とは異なる何とも言えぬ愉快的雰囲気が醸し出されるのである。

繰り返しになるが、留学の醍醐味は現地でしか味わうことの出来ない文化に触れる機会があることであると思う。現在はインターネットが大変普及し、地球の反対側で起きていることを YouTube など容易に見聞きすることが出来る。しかし、いつの時代も、その人々と時間と空間を共有して初めて味わえるものがある。それは自分の部屋のパソコンの画面のしているのとは全く質が異なるのである。しかし、たとえ現地へ行っても、それはあくまでその文化に触れられる「機会」があるのみであって、そこにいれば自動的に文化に触れられるわけではない。現地の方たちと密に接して初めて可能となる。私の場合、現地の方との橋渡しとなってくれたのが、ロータリーであった。その意味で、私はロータリーの皆さま方に心から感謝している。ロータリアンであるダンカンさん、フェイさんとの出会いがなければ、スコットランドの民謡への興味も湧かなかっただろう。

このかわら版を通じて、現地で出会ったスコットランドの民謡を紹介していきたい。



ホストカウンセラーの  
ダンカン・アンダーソン氏（右）  
奥さんのフェイさん（中央）、  
お孫さんのジェイミー君（左）



RI1020 地区の 1999 年度地区大会の後、ホテルの部屋でスコットランド民謡を歌っている様子。スコットランドの民族衣装であるキルトを着させて頂いた。

## 1990年代半ばのイギリス留学（1）

学友会 幹事 原田 俊明

1995年～1996年度派遣 国際親善奨学生

留学機関：ランカスター大学（英国）

留学した当時と今とではロータリーの奨学金の内容もイギリス入国の手順も大きく様変わりした。これから留学される奨学候補生のお役に立つ要素は少なからうが、留学時に思いついて書きとめた文章を参照しつつ、拙劣ながら自らの留学体験について書き起こしたい。

振り返れば、留学した1995年は国内では阪神淡路大震災、続いて地下鉄サリン事件や警察庁長官狙撃事件が起こった混迷の年だった。対外的には第二次世界大戦終結から半世紀という節目の年でもあった。インターネットや電子メールも一般には普及しておらず、パソコン通信という名で一部のマニアが遣り取りしていた時代だった。私自身メールやネット、それにケータイやデジカメとも無縁の生活を送っていたとは、今となっては隔世の感がある。ノート型パソコンこそ1台所有していたが、当時の私の知識ではワープロ機能だけで手一杯だった。修士課程を出て少し経っていたが、埼玉県内の小さな短大の代用非常勤講師として半年間という短い期間だったが初の教歴をつけることができたのは大きな収穫だった。嬉しかったが、困ったこともあった。その短大の勤務契約が同年9月まで入っていたせいで、渡英の時期を9月下旬にせざるを得なかった。もっと早くから英国生活を始めることで10月の授業開始までの間、現地に慣れておきたかったのだが、それは叶わなかった。

果たして9月25日(月)、日航機で予定通り17時近くになってロンドン・ヒースロウ空港に到着した。エヴァンストンのロータリー財団本部が日航シカゴ支店で手配してくれた格安航空券を使っただけの渡航だった。着いてみると入管で長い行列に並ぶ羽目になり、入国審査に1時間ほどを要した。到着したのが日航機だったため、並んでいたのは殆どが日本人だった。

今から見ると、前世紀末の英国就学査証の取得手続は何とも場当たりの的だった。現在でこそ英国も他国に倣い、東京の在外公館（英国の場合は千代田区一番町の大使館から独立した東新橋の査証センター）が長期滞在者の事前審査を行なうようになったが、私が留学した当時は留学生も一般観光客と一緒に現地空港で係官に審査を委ねる方式だった。旅券の他に入学許可証とロータリー財団の証明書類を見せた上で質問に答える段取りだった。個々の審査官の性格やそのときの気分や心証によっては滞在許可期間に長短の差が生じ、公平性にはやや疑問の残る審査方法だったが、その反面、審査官任せで厳密さを欠いたやり方が却って自分には合っているような気もした。

緊張して審査に臨んだが、係員は感じの良い優しい雰囲気の良い女性だったので安堵した。ニッコリ笑ってスタンプを押してくれた。右隣の中年男性係官は英語のできないロシア人に手を焼いて、「外国語が流暢に喋れたらなあ」と溜息をついていた。“I wish I would be fluent in another language.”という仮定法の文章がはっきりと聞こえた。私は内心“I shall be fluent in your language.”と心に誓ったものだ。一方、英語のできない日本人には、トランシーバーを手にした日本女性の係官が合図を受けてせわしなく駆け廻っていた。

次に恐れていた税関があった。当時はまだ高価だったノート型パソコンとプリンターを持ち込もうとしていたので、付加価値税プラス関税で、最悪の場合5万円相当額の徴税も有りや無しかと気を揉んだ。「申告なし」の緑色のランプの方をとおいて課税対象品が発見されると犯罪者のように扱われると聞いていたので、正直に「申告あり」の赤ランプへ進んだ。迷路のような道を辿っていくと果たして殺風景な税関があった。係官は山羊髭を生やしたシーク教徒の男性だった。話の分かる人で、無税で通関できた。

ロンドンには予定通り3泊した。5年前の春に欧州一人旅5週間の一環で訪れたときには、自分がこんなにも早くに留学生として再訪することになるうとは思ってもよらなかった。自らの幸運に感謝し、興奮した。しかし今回は毎日が雨で、ホテルの部屋に籠りがちになった。持参したノート型パソコンで文書を作成したが、このときからパソコンの調子が悪くなってきた。

9月28日(木)に初めて留学先のランカスターに到着した。ロンドンから所要3時間の旅である。列車がランカスターに着いたら17時を過ぎていたが、辺りはまだ明るかった。ロータリアン・カウンセラーのヴィック・ホプキンス(Vic Hopkins)氏はどこにいらっしゃるだろう、と思案しながらプラットフォームを歩いていると、口の周りに短く刈り込んだグレーの髭を生やした眼鏡の紳士に声をかけられた。私の写真を事前に日本から送っていたので、難なく見つけてもらえた次第だ。

ホプキンス氏の運転するアウディの助手席に乗って、3マイル(5キロ)ほど南に位置する私の留学先ランカスター大学(Lancaster University; University of Lancaster)へ向かった。こちらのしきたり通り、親子ほどの年齢差にもかかわらずお互いファーストネームで呼び合うことになった。

大学には10分程度で着いた。それは感動の瞬間だった。感動が大きすぎて写真を撮り逃したほどだ。学内に無数にある駐車場のうちの一つに車を停めて初めてランカスター大学のキャンパスの空気を吸った。車外に出て、寮はどこだろうとばかりにヴィック(ホプキンス氏をもうファーストネームで呼び始めた)と二人で右往左往するうちに、激しい雨に降られ、一緒にずぶ濡れになった。学期の始まる前で学内に人影は疎らだったが、人に聞きながら、ようやくその晩だけ宿泊することになっていたグライズデイル学寮(Grizedale College)の守衛室を見つけた。

(つづく)

## 留学生生活を振り返って

学友会 副幹事 中津川 祥子

2009～2010 年度派遣 津田健三・仁美冠名奨学生

留学機関：ミラノ音楽院（イタリア）

### 【出発前の私】

私が歌を習い始めたのは大学に入る前のことでした。それからもう 10 年以上、ピアノや声楽を学んできています。現在はお茶の水女子大学大学院博士後期課程にて、日本でオペラがどう受け入れられ浸透しているのか、ということの研究中です。声楽の実演も続け、そのまとめとして、2007 年にリサイタルを開催することもできました。留学を考え始めたのは、その頃のことでした。

私は大学からずっとお茶大に通っているのですが、通い慣れた場所、良く知った先生も多くいる、という勉強しやすいなかで生きていました。長く安定した場所にいると、目標というものを失いがちなところで生きてしまいそうになり、いつも「これでいいのか、何かしなくては」と焦っていた気がします。それに、西洋で生まれた音楽を、ここ日本で演奏することにどんな意味があるのか、演奏者としてどのような態度をとるべきなのか、漠然とはありますが、考えていました。日本以外の土地に出ればそれが分かるのではないかと。先に海外に出た先輩から話を聞いたこともあり、留学への気持ちは徐々にではありましたが、高まっていったのです。

しかし、外国に行ったこともなければ、家族と離れたこともない。ロータリーの奨学制度を利用するためには勉強もかなり必要…。留学への道を踏み出すことは、何事にも慎重な私にとっては大変なチャレンジでした。それでもやろうと思ったのは、世界を狭くしたくないから。外へ外へ、広がる気持ちをもっていたいからでした。

### 【行ってからのあれこれ】

#### 1. 言葉の不慣れ

日本でネイティブに 2 年ほど習っていききましたが、とにかく早い！聞き取れないことにただただ焦る期間がありました。特に定期を作ったり郵便局で滞在許可書の申請をしたり電気代を払ったりする時は混んだ窓口で早口でまくしたてられ、わからなそうな顔をする正面から舌打ちされます。窓口でもスーパーのレジでも、若い女性に当たると対応がひどいです。若い女性が優しくない国、イタリア。

言われてすぐに分からないということに落ち込んでしまうこともしばしば。やはり日本での勉強には当然ながら限界があって、言っていることのすべてではなく必要なところだけ聞き取ればいい、方向転換で来てからはいくぶん気が楽になりましたが、行ったばかりのころは知人もいなかったこともあり、心細くなることも時々ありました。部屋のテレビをつけっぱなしにしてニュースを流し、いつもイタリア語に触れるようにしたのはいい方法だったと思っています。

#### 2. 歌の面で優劣がはっきりついた！

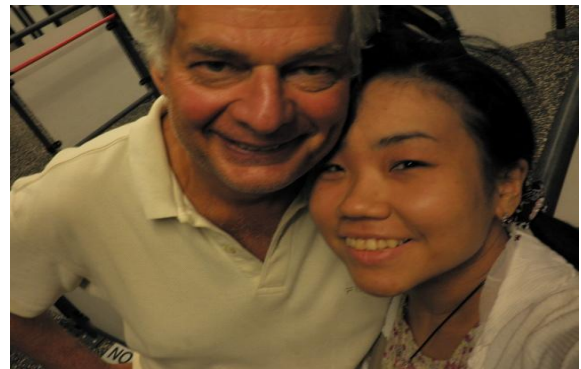
私の通っていた学校では、ボランティアで老人ホームなどに出張コンサートをしていました。その出演メンバーは先生による選抜で決まります。私は平均して月に一回以上は出していただけでしたが、拍手の差があったことは衝撃でした。日本では「歌ってくれたから拍手しなきゃ」というような気遣いのようなものがありますが、イタリアでは一切なし。良かったら拍手、そうでもなければちょっとだけ。歌うテクニックも必要だけれど、いかに聴き手を意識し聴き手のために歌うかが大切なのだということを思い知った瞬間でした。ただ上手になりたい、と思っている歌手の演奏では観客は感動しないのです。そこに居る人たちに語りかけるように、そこに居る人たちの気持ちがよいものになるように歌わなければ。それは相手を思って行動すること。やはり、観客とのコミュニケーションが出来る歌手は人気がありました。自分の上達だけを考えてはいけない理由が分かりました。この発見は一生ものです。

### 3. 楽しかったこと

1. 現地カウンセラーさんのお宅でのディナーに呼んでいただけたこと。

彼自身もお料理が出来るので、たくさんのお客さんをお呼んでもちよりパーティのようなことをしていました。

今も連絡を取っています。昨年での日本での災害を、とても心配して居られました。ミラノでも大きなミサが執り行われたそうです。



[現地カウンセラーの Flávio Garcia 氏。本当の家族のように可愛がって下さいました。ああ、会いたい！]

2. スーパーでの買い物。

どの食材もサイズが大きめだったり、カラフルなパッケージだったり、とにかくパートなんかよりもずっとおもしろかった！日曜日、場所によっては土曜日もお休みだったり、お昼休みで閉店してしまったりするのは困りましたが、色とりどりの大きな野菜や大きくカットされたチーズの山を見ると、食文化の深さがうなずけました。

#### 【帰ってきてから思うこと】

日本ではいつもしていた理論武装というか、感情の周辺を取り巻いていた常識とか配慮とか、そういうものイタリアでは層を薄くしていました。そのぶんダイレクトに胸に響く事が多く、そのひとつひとつが感動となり経験となって今につながっているのだと思います。気持ちの振れ幅がとても大きく、毎日が新しさ、楽しみに満ちていました。海外で暮らすのだから当然ですが、日本との違いに戸惑って大変なこともあったけれど、今となってはそれすらも楽しい思い出です。

こういう時間、私に挑戦する機会を与えて下さって、感謝の言葉は尽きません。留学前と後とでは、物事に対する本気度、というか、どのレベルまで突き詰めるか、ということに対

する心構えが大分変わったと思います。この態度をもって、博士号取得まで走り続けたいと思います。

## 学友会 幹事会からのお知らせ

2770 地区各学友会では、学友会活性化のための名簿整理と皆様のご意見収集に努めております。つきましては、以下の項目をご記入の上、学友会のアドレスに送信していただきますようお願い申し上げます。

(1) お名前 (2) 留学年度と奨学金の種類 (財団・米山・GSE・VTT) (3) スポンサークラブ (4) 留学先 (5) 現在のお勤め先または職業 (6) ご専門 (7) 学友会へのご意見やご要望

学友会メールアドレス [gakuyu2770@gmail.com](mailto:gakuyu2770@gmail.com)

どうぞ宜しくお願い致します。

学友会 幹事会

---

### 編集後記

「学友 かわら版」第一号をお届け致します。

「かわら版」いうアイデアは、『効果 10 倍の〈学び〉の技法』(吉田新一郎、岩瀬直樹 著 PHP 新書) という本の中で見つけました。ある高校で、教員が互いの教育の質を高める一つの方法として、それぞれが教室で「やってみてよかったこと」を、A4サイズ1枚程度のレポートにまとめて他の教員に配布する、ということを実践しているそうです。教員は職員室では一堂に会していても教室は自分の城ですので他の教員には分かりません。それをこのようにレポートにすることで情報共有が出来るというものです。この方法は学友がそれぞれ持っている情報や知識を共有する手段としても使えるなと思ったわけです。

この「かわら版」は気軽に自由に書けることが原則です。そうすることで出来るだけ多くの学友に投稿して頂きたいと思っています。これが続くことによって「RI2770 地区の学友の文化」が芽生えてくれることを祈っております。

(「学友 かわら版」編集担当 小池剛史)